生存科学研究ニュース

VOL. 8. NO. 5.　　1993. 9. 10. 発行

発行：財団法人 生存科学研究所
〒104　東京都 中央区 銀座4−5−1
聖書館ビル 303
電話　03−3563−3518

第3回　生存科学シンポジウム「生存科学における発展　Ⅲ」

7月10日（土）午後、上智大学会議室において、生存のバイオロジカルな基盤の一つとしての脳機能をメインテーマとして、第3回生存科学シンポジウムが開催された。

開会の挨拶では、公益信託武見記念生存科学研究基金の板垣與一運営委員長が、故武見太郎博士が提唱した生存科学の意義とその重要性を述べ、あらゆる英知を結集してその確立と発展に務めようと呼びかけた。

＊　＊　＊　＊

シンポジウムの冒頭、司会の前岡崎国立共同研究機構（生存研評議員）江橋節郎氏は、２１世紀はブレインサイエンスの時代とも言われるとして、ヒポクラテスから始まるその学問の流れを解説、脳の機能局在の研究からさらに機能形態学・細胞生理学・ニューラルネットワークの研究へと進んだ現状を披露し、地味な研究ではあるがそれへの取組が重要であることを指摘した。

＊　＊　＊　＊

講演第１席は、日本大学医学部教授酒田英夫氏。テーマは「脳の認識と記憶のメカニズム」。

氏は、自らの研究をはじめ現在のブレインサイエンスの先端的研究を披露。脳機能の局在を研究する機能形態学がポジトロンＣＴ等の技術の導入により進歩し、大脳連合野で行動・空間・対象等の認知機能の局在や作業・空間・意味等の記憶機能の局在が判明してきたこと、また、高度な機能をもつ認識細胞の存在や単純なものから複雑なものへと積み上げていく脳における認識のプロセス等を紹介した。

講演第２席は、上智大学生命科学研究所教授青木清氏。テーマは「動物の感覚とコミュニケーション」。

氏は、専門とする比較行動学的研究の立場から脳の機能の研究成果を紹介。メンフクロウの音源定位の研究では、脳のなかに出来ている音源定位のための構造を、雛鳥の発声に関しては、先天的にもつ発声の鋳型と模倣の意義を説明し、生物の脳は外界との接触により環境に応じて、生存に都合の良いような構造に進化したり機能を発揮するように発達することを示した。

講演第３席は国立小児病院院長小林登氏。テーマは「胎児・新生児の行動発達・・脳をシステム・情報論的にとらえる・・」。

氏は、生態システムはある生体機能を目的とする細胞・組織・臓器の組み合わせであり、プログラムは生体システムを働かせる生物学的コードの組み合せである、としたうえで、永年にわたる胎児・新生児の行動の研究から、脳には、情報をインプットすればシス

テムを走らせるプログラムができていること、体を働かせる、コミュニケーションをする、まねる、信じる等の生得的プログラムがあること、プログラムには心のプログラム、体のプログラム、成長・発達のプログラムがあり相互に関連することを示し、プログラムには小さい機能ユニットがあり、それらが環境とのやり取りで組替えられる、と述べた。

会員研究会「生死と生存」第6回
リスク管理のジレンマ
ー湖の生態系リスクを通して考えるー

7月3日（土）、平成5年度第2回「生死と生存」会員研究会が生存科学研究所において開催され、滋賀県琵琶湖研究所総括研究員、中村正久氏が、表記のテーマで報告した。

氏は、琵琶湖の無酸素化や、スペイン・ラグナ湖の富栄養化・汚染を例に取り上げて、湖の「生」や「死」、湖の「生存」という観点から、人類や生態系の生存の問題を論ずることの意義をまず述べ、特に、湖は陸に取り囲まれた閉鎖的な環境、いわば「島」としてとらえることができる故に、その生態系が持つ、種の多様性からみた場合の「もろさ」と、また琵琶湖で出現した赤潮、あおこ、ピコプランクトンへと至るような種の変遷における「しぶとさ」を知ることは、人類・生態系の生存の問題を論じる上で重要であると指摘した。

次いで、タイ・ソンクラ湖やインドネシア・サグリンダム湖の例を挙げ、人の生活・生存の問題と、湖をめぐる地域開発との関係を論じ、生態系に及ぼすリスク評価が環境政策にとって重要であるとともに、社会的背景を考慮したリスク管理の必要性を強調した。

最近では環境倫理学によって、世代間倫理の問題も主張されているが、環境問題においては、将来の世代に選択の幅を持たせることに価値があると考えられることや、なぜ人類は生態系を破壊する可能性を持っているのか、またそれを回避する有効なシステムを持っているのかなどの問題について、今後の研究課題を示した。

討論では、人類や環境に及ぼす実験の安全性や、環境問題などに関して限られた情報の中での合理性とは何か等について議論があった。

第7回東西の健康観・医・薬研究会
メディアの中の東洋医学

5月14日（金）午後1時半より、表記のテーマで、（株）協和企画社長梅田幸雄委員と、潮出版社編集局背戸逸夫委員が報告した。

梅田氏は、「医学メディアのなかの漢方薬」と題し報告。氏は、故・武見太郎日本医師会長に協力する形で、医学メディアのなかで活動してきた。漢方エキス製剤は、まず1976年日経メディカルに特集号が発行され、翌年日本短波放送で漢方医学講座が始まった。その後も多様なメディアにより、漢方医学の啓蒙、漢方エキス製剤の広告や特集など多くの企画が手掛けられた。広告では、日本の医療と文化の中での医薬品などの意味を見出す時代感覚が必要である。しかし、ただ売れれば良いという時代は変わりつつあり、漢方薬を含めた医薬品全体の「合理的利用」という動きのなかでの広告のあり方が現在問われている、とした。

背戸氏は、「総合メディアの中の自然」と題し、近年の世界の動きの一つの変革点となった1991年という一年を取り上げ、メディアに現われた社会現象を分析した。この年、バブル経済が崩壊し、中東湾岸戦争があり、ソ連が崩壊し、また環境問題が大きくクローズアップされた。ボルボ社が、「私たちの商品は、公害と、雑音と、廃棄物を生み出しています」という広告を出し、企業・消費者間のコミュニケーションに変革を与えた。『清貧の思想』が予想外な売れ行きを示した。いくつかの社会現象のスケッチからも、一般メ

ディアの中で「自然」が次第に大きく取りあげられ、近代的な色彩をともなって現われてきたことを示した。

第８回東西の健康観・医・薬研究会 “もう一つの医学はあるか”

７月１６日（金）午後２時より、表記のテーマで、東京大学文学部中国哲学助教授川原秀城委員と、東京大学先端科学技術センター長村上陽一郎氏により報告がなされた。

川原氏は、「科学史からみた中国伝統医学」と題し、科学史研究も科学そのものと同じく“時代”の影響を受け社会の動きと連動しているという観点から、日本における中国医学史研究を３つの時期に分けて解説した。

開拓期には、欧化政策に対する反動の一つとして、日本医学史、中国医学史の研究がなされた。充実期には、日本による近隣諸国の支配などを背景として、実証的、即物的研究がなされた。現在は、ベトナム戦争以後、アメリカや日本の価値体系が揺らいだ時期でもあり、それと対照的に、他文化としての中国医学に対する“優しいまなざし”が生じ、一面、過大の評価もなされた。

近年中国の変化、世界状勢の変化から、どのように研究が変化していくかは興味が深い、とされた。

次いで村上氏は、「科学相対主義とはなにか」と題し、共時的に異文化をみる文化人類学の方法を、歴史の中で異時間に投影することにより、科学を相対的に見る見方について解説した。

文化の多様性は、人間の行動形態の多様な可能性を反省しているが、ある社会ある時代に実現されているものはその多様性の一部にすぎない。文化としての科学についても同じことがいえる。従って他の可能性を「非科学的」として拒否することは、人間のもつ多様な可能性の一つを、否定することになる。科学を広く、自然とのつき合い方、概念体系とすれば、科学の多元主義は成り立つものである、とした。

当日の会は盛況で、多方面にわたる議論がなされた。

「科学技術・生存・評価」研究会準備会

７月１６日（金）午後１時より、筑井甚吉副理事長を委員長として表記準備会が開催され、評価の必要性とその困難性を検討し、協議の結果、よりよい生存を価値前提とた具体的な評価に取り組むことを決め、先ず肝属郡医師会立病院の検診活動の分析・評価に取り掛ることとし、近々第１回の研究会を開催することになった。

九州プロジェクト 別府市の総合調査研究委員会

表記委員会が、生存研において７月１２日（月）に第３回の会合を、同２８日（水）に第４回の会合を開催し、去る６月２８日（月）別府市で開催された第１回現地研究委員会の報告を行った後、生存と実践的総合調査法の考え方に関する提案を巡るディスカッションを行い、さらに平成５年度総合調査報告書の基本的枠組と具体的展開のポイントを討議し、また、別府市で開催する「人間性回復都市“べっぷ”」の実践的展開のシンポジウムや、行政職員とのワーキング・グループの形成について協議した。この結果、シンポジウムは９月２５日（土）に行う予定に決まった。

東北プロジェクト 第７回「安家の将来を考える会」

８月９日（月）午後７時半より岩手県安家公民館において、地元住民と（財）森と村の会副理事長上飯坂實東大名誉教授、（財）岩手県予防医学協会栗原耿常務理事、岩泉済生会病院柴野良博院長、小泉浩郎会員、小平専

務理事他が参加して、表記会合が開催され、安家の健康状態、検診や出張診療の問題、学校給食の将来等が、地元の保健・福祉のあり方や地元経済さらには生き方や郷土の文化、住民自治などの視点をふまえて討議された。

これに関連して生存研のメンバーは、岩泉町長、保健課、保健所、済生会病院、久慈の営林署、県立久慈病院等を訪問した。

九州プロジェクト
肝属郡の総合調査研究委員会

８月１９日（木）午後１時半より、平成５年度第３回の研究委員会が開催され、土方・堀越両委員の肝属郡現地調査報告と肝属郡医師会立病院今隈院長の病院経営現状の報告に基づき、肝属郡の生存基盤の確立とそれを土台とした医師会病院の経営基盤の強化、住民の保健・福祉の向上のための討議が全員で行われた。

常務理事会ならびに理事会

７月３０日（金）午後２時より常務理事会が開催され、役員の人事についてとハーバード大学武見プログラムについての報告が行われた。

前号で新役員について紹介したように、山口理事は以前から多忙の故での副理事長職の辞退を希望されていたにもかかわらず今回も理事全員の推挙で副理事長に押されたが、地元での公的仕事がさらに責任の重いものとなったため、是非にもと強い辞意を申し出られたため、副理事長でなく理事に留まることになったこと、これに関連して卜部理事が常務理事に推挙されたことが報告された。（前号の追補版の名簿が違っていたことをお詫び申し上げます。ご訂正をお願いいたします。）

武見プログラムについては、発足当初から武見プログラムの柱となるべき「武見思想」に関して、生存研とハーバード大学との間に理解の食い違いがあることが明確になり、双方で今後のあり方について真剣な協議を続けてきたが、最近、武見プロフェッサーのＬ．Ｃ．チェン教授から、これ以上の協議は成果がないとして、プログラムの中止と昨秋推薦した武見フェローについての受け入れ拒否を申し入れてきたことの報告と、この申し入れを受け入れる方向での対応の協議がなされた。

８月３１日（火）午前１０時より理事会が開催されたが、これは前号で紹介した生存研の寄附行為の改訂に関して、科学技術庁が実質的内容に影響の無い範囲の一部の字句を庁内の用語の整合性のために改訂することを希望してきたために、理事会にその了解を得るためのものである。

生存科学研究所
西日本シンポジウム’９３
予　報

テーマ：
「２１世紀の健康都市大阪を目指して－都市化への健康政策－」
（第２回）

日時：１０月１３日（水）ＰＭ　２～５
場所：大阪府医師会館
講演：
Ⅰ．健康と環境
大阪府立公衆衛生研究所
小町喜男所長
Ⅱ．大阪市における健康の現状と展望
大阪大学医学部公衆衛生学
多田羅浩三教授
Ⅲ．長寿社会の循環器病学
神戸市立中央市民病院
循環器センター吉川純一内科部長

研究所日報

７月１０日（土）第１回基本構想委員会
７月１２日（月）編集委員会
７月２８日（水）「生死と生存」委員会
８月１１日（水）東西の健康観・医・薬　研
８月３１日（火）筑波大学北上プロジェクト報告会